

遺物

今回の調査では、主に 4 - 4 区で、古代から中世にかけての遺物が出土しています。

古代の土器には赤色で軟質な土師器と灰色で硬質な須恵器があります。今回の調査では、現在のところ形がはっきり判る土師器は少なく、小破片での出土が大多数を占めてます。須恵器では杯や杯蓋などの食膳具^{しよくぜんぐ}が出土しており、甕・壺などの貯蔵具^{ちよぞうぐ}の破片が出土しています。そのなかでも、横瓶と呼ばれる貯蔵部分が米俵の形をした須恵器も見つかっています。

中世の土器は、ごく少量ですが出土しており、その多くが珠洲焼となっています。珠洲焼ではすり鉢・甕が破片ではありますが確認できました。

土器以外の遺物では砥石や木製品が出土しています。木製品は漆塗りの小型椀が出土しました。黒漆を塗布したあと、表面に赤漆を塗布しており、より精巧に作られた漆器であると思われます。また、その底面には「大」もしくは「才」「丈」と判読できる文字が刻まれており、作者の刻んだ一種のマークではないかと考えられます。



須恵器 有台杯



須恵器 有台杯



漆器 椀



漆器 椀底部

これまでの調査から

石田遺跡・梅田遺跡の調査は平成 27・28 年度と実施しました。去年までの調査は今年度の調査区に挟まれた区域の調査を行い、数棟の掘立柱建物が見つかった居住域と水田遺構を中心とした生産域、それを区画する幅広の溝が確認できました。今年度の調査では、その区画がより整然とした形で確認できたものと考えます。近隣の遺跡では、特に割前遺跡^{わりまえ}の区画とよく似た配置をとるものであり、割前遺跡では確認されている建物群は今回の調査区外、特に南東部に広がっているものと推測されます。

これまでの調査では、生産域と居住域といった大きな生活区を分ける意識的な境界線としてとらえていた区画を、より精細な建物単位といった小単位としてとらえる必要があると思われます。

さんぽ遺跡物語

石田遺跡・梅田遺跡現地説明会

平成 29 年 8 月 20 日 (日)
三条市市民部 生涯学習課

はじめに

石田遺跡・梅田遺跡は三条市須戸新田・井栗地内に所在する沖積平野^{ちゅうせき}に立地した遺跡です。一般国道 403 号三条北バイパス道路改築事業に先立ち確認調査を実施したところ遺跡が良好な状態で残存していることから、事前に発掘調査を実施することになりました。今年度は平成 27 年度調査区の西側から、市道下谷地柳場新田線までの範囲と、平成 28 年度調査区の東側、西川から東へ 100 m の範囲について調査を実施しています。遺跡の時代は主に平安時代と室町時代で、現在のところ須戸新田地内において、居住域の中を区割りしたと思われる、格子状の溝などが確認できました。現在の須戸新田は、地名に「新田」とつくことから近世以降に開発が進められた集落であり、それ以前についての詳しい状況はわかっておりません。これまでの調査を踏まえながら、近世以前の大槻潟縁辺部における、小規模な集落の展開を読み解いていこうと考えています。



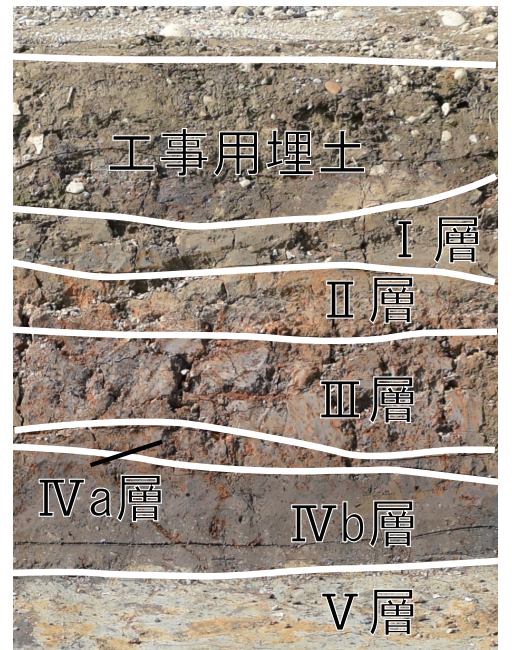
遺跡位置図 (S=1:50,000)

調査の概要

基本土層

調査区内の土層堆積状況は以下の通りです。

- I 層：表土（現在の田面）
- II 層：黄灰色粘質土（耕作土床土）
- III 層：灰黄褐色粘質土
- IV a 層：褐灰色粘質土（古代から中世遺物包含層）
- IV b 層：黒褐～黒色粘質土（古代から中世遺物包含層）
- V 層：地山（上面が遺構確認面）



基本土層

遺構

今回の調査は地区を大きく2つに分けて進めています。一部調査の終了した1－2区では数条の溝と数基のピットが見つかり、その中でも調査区北東部で確認できたP1201は、柱穴と思われる層位を示していました。今後の1－1区の調査では、掘立柱建物が位置している可能性があります。

4－4区では井戸や溝、土坑、柱穴等の遺構を約130基検出しました。農道を挟んだ調査区の南側では、幅広の溝が2条（SD4908・4913）見つかり、最近まで何らかの流路として使用されていた痕跡も見つかります。調査区のほぼ中央部には、直径1.7m・深さ1.3mを測る大型の井戸（SE4950）が見つかります。また、その井戸から東に目を向けると、「L」字状に折れ曲がったSD4948とSD4977に挟まれた小路状の空間が東に伸びています。この「L」字状のSD4948の南東部には、おそらく何かしらの建物が存在していると考えており、それらの建物を区分けし、井戸までの道を配備するなどの計画的な区画を考えていた可能性が示唆されます。また、中央部南側に位置するSD4933は幅が狭いながらも深さは40cmを測り、一度埋まってしまったものを、再度掘り返している痕跡まで見つかりました。何かしらの高い隔絶性を持たせた溝として使われていたとの推測が立ちます。

建物の痕跡としては、柱穴の可能性が高いP4956が挙げられます。この柱穴に対応するようなピットは確認できていませんが、こちらも調査区外の南東部に広がっているものと考えられます。

調査区の北側には、格子状に交差する浅い溝群が検出されています。この格子状の溝群が何を意図したものなのか、今後の課題となっています。

4－4区の調査区を大きく概観すると、中央部西側辺りから若干地形が下っており、その傾斜の下り際に幅広で深い溝が2回に渡って掘られていたことがわかりました。現在はまだ調査中ですが、おそらく調査区西側以西は若干の低地になっており、低地を利用した生産域が位置していたものと考えられます。そうした断片が調査区南西部で検出されたSX5004であり、平面形や断面の形状から「堀込田」であろうと推測しています。



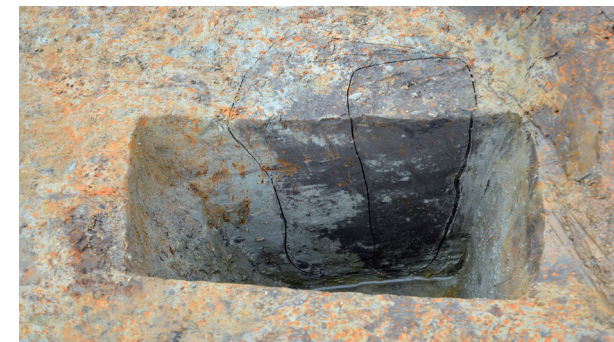
4-4区遺構集中区平面図 (1/300)



調査区全景 (西から)



1-2区全景 (上が東)



柱穴 (P1201) 断面 (南から)



4-4区遺構検出状況 (上が東)



井戸 (SE4950) 断面 (東から)



柱穴 (P4956) 断面 (南から)



溝 (SD4933) 完掘状況 (東から)



溝 (SD4933) 断面 (東から)



区画溝 (SD4948・4977) 完掘状況 (東から)



溝 (SD5001) 遺物出土状況 (南から)